



里見八犬傳 拾六篇 卷四十



殊小猛くて寄隊の勢と憚る敵の先陣不備なる戦車の下へ潜り入る突と
前へ走り去るもの然る車と跳躍る人馬を揮ぎ馳せ牙を齧る焦火散
乱して又戦車燃移ると里見の士卒は豫より信乃が準備の鉄硝の小石を
交へて裏を射しとるかくも推乃其火は激しく擲られ火勢立地の激発も
車上の武者も車下の人馬も焼れて免る者幾稀大將是れ加ふる且明の風
吹出ると軒遇突智の泉本涯りるければ寄隊三回の大將を顕定成氏憲房は
其隊長重勝在村素行們錐布五六雁裂八九頭人若兵近習もあはれ心腹は
とむらひ敢戦ふ擬勢も乱れて謀ぐ士卒と俱火を避け煙を巻れとて或を
敷系に馬を鞭ち或は強断するうと執り或は一條を鎧の雨三人を擲て相争ふ
相擇を开き正面より大塚信乃並直真間井樅二郎左右に則大飼現八継橋
綿四郎杉倉武者助田税力助以下の勇士等二回一度隊兵を找めて煙の隙

より攻入る中々不儘せず敵も小共野豬も亦自家を幫助て慌て叫ぶ敵の
雑兵を牙の引掛け擲り勢ひ人畜進退合期して出沒不測の開が上寄隊の
都て風下の在り敵も逐れ焔の噴ひく面を向て由るれば將帥士卒の差別も
咸直頼れ敗走ると天士並直元逸友秋季も香高深も二回一致の擲速を
く猶脱しと程を霜氷る夜の長りも朝風寒く明ふけり月十二月八日
中肩谷定正の水路を安房へ推渡りも稲村の城を屠んと豫契り日本日
あるれども寄隊四萬のその中然しも恥と知り名を惜む勇士もあざざれ山
内の隊の遊軍の頭人か絶内外進惟定と喚做する者其副の頭人建柴
浦之介弘望と只二騎馬を乗駐り西聲高く喚るや建柴自家の逃歩哉
多寡の知れる敵の為火攻せられと逃る那里へ必も志ある者
我々續けと辱め嗜り馬の上鎧を打振る惟定の信乃が隊も向又弘

望の現八を推さく俱血戦を然其隊不相従ふ雄兵僅小二百名王と都
助死を見くく一霎時の挑戦ありて大士の先鋒の頭人真間井秋季
橋喬梁俱中兵を用いて中と崩落捕籠て息も頼れを攻りて惟定と望の
太刀折れ勢以突りて俱陣歿して名を送り其隊の兵も多く歿れて命を免
るの稀なり有倭り程山内頭定の逃る士卒小推立られて憶を遙く延ら
けるが這光景を見くく他敵と喚りて馬を返して駈向へ隊長白石重
勝を連り士卒と罵獎して其里より返り合を勢以始り似されも猶二三
萬の士卒あり然成氏も憲房も且羞且稍是は氣を以て俱備と建雨本
は二面齊一返り來る信乃らち見て毫も謀を隨即人を走らせり現八
直元們亦示さる現八窮寇の逐ふる寄隊の返り合せて兩度まで敗軍の
恥を雪め多く欲さるん遮其他既其戰車を燔れて今脚を鮮魚似

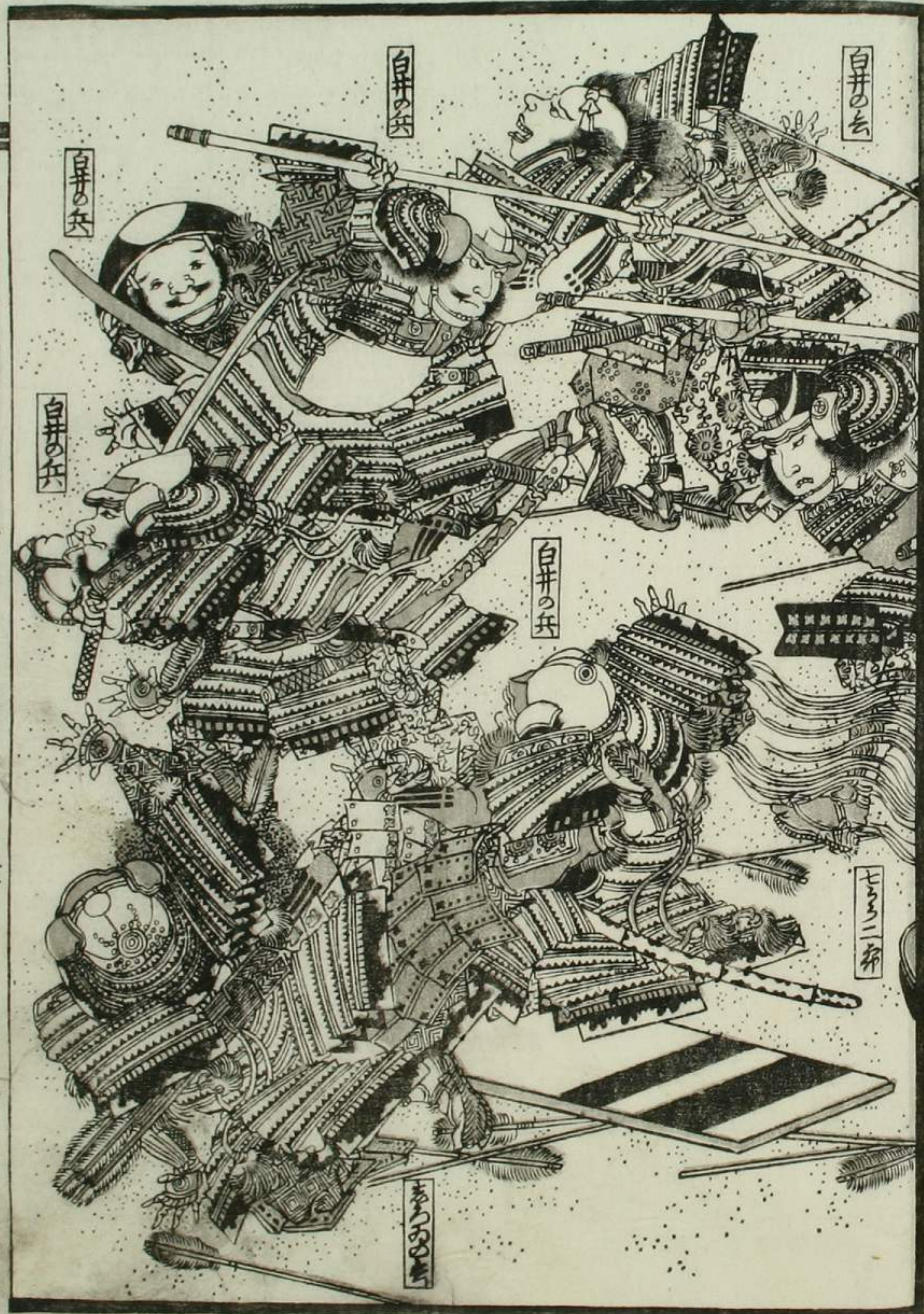
なり又何更さすせん各切所引受り其疲勞るを敷んと急謀その
利あるを現八も亦直元逸友も陣俱退せり或水田と前あり或の
樹柵より地方の備と建る程ありて寄隊の三將隊長頭人三隊の
別れて其馬直元返り攻破らる競ども樹柵水田と遮られて人馬の進退自
由らねば前戦の時を移して白石重勝焦燥る士卒小下知して巨盾を幾
ともる深田の水へ投布々々人馬を涉りて短兵急小拘り競ども大士並
直元們の樹柵の間の敵と柱を左右るく攻め破られ一進一退其機小稱
士卒の宛る脚の像く出沒不測の術を盡せ寄隊の敷る者も多し
ども大勢ありて又立替り入乱れり時移るまで戦ひけり話分兩頭ある朝
團府臺の城ゆる昨夜田稅逸友が義通君小見參の折大塚信乃の意哀と
傳へる明日の開戦の進退を箇様々々といふ違ひなき明や反比より一箇

是當郡の根本也。這岡山咽喉也。然ると今この岡を棄て、敵に向ふは勝るべし。寄隊必其の岡に据りて我咽喉を扼ん然ると其の臺の城も守るべし。至んば自らを思へば危し。最始くそのいふに君の所御座る大士、退口ありて必後易かるべし。臣等一二千の雄兵を領し、馳向ひ敵の中りて信乃現八門の力を勦せん。其の謀に任さるるのみか。と詞を聲して諫ると義通、頭を掉りて不と。我弱冠の身と見くると今只漫不賢と。老の諫と拒むるは、大江親兵衛比。と。羊二の兄をいふ。その地の主將を命せられ。閉戦二度及ぶまで。敵の旗を見む。自家の閉戦危きを知らず。必しもあふ異日何を面目や。館の見参入。又縦敷とも敷くとも。大士と安危を俱せんと。其の饒ねと。叩言が。すくうの勸解。搗尻も。怖るる。辰相竟諫難く。考らん。是非及ば。む。衆皆御伴仕らんと。心より更陣御あり。従ふ士卒四千餘名。酒就鳥古内。

振照俱教二と先鋒の頭人として辰相則後陣と。義通の騎馬の前後左右。其の事熟する。老兵近習。毎皆華麗の撰甲。姓名寫す。其の連あ。羽翻た。白旗三四流。寒けた風が吹靡せ。氷成る。器械の鞆と外と。朝日赫火。隊伍齊々。救正々と。那戰場へいそぎ程。おつと。十七八町や。端よく一隊の敵兵あり。其勢約二四千有餘。両矢筈の花。踊深成る。旗と。找めて。這方へ。東の。撞見けり。此は別人を。上野園白井の城主長尾判官景春。今番の役の先鋒の頭人。梶原後平二景澄と。吸做者。介る。景春の。扇谷。定正。催促に従ふ。既に陣の。五子へ。赴く。猛可。漏出せる。如。今。その地。在る。事の。情由。と。什麼。と。後。原。の。他。の。獨。立。の。志。あり。其。の。故。定。正。の。軍。兵。催。促。従。ひ。か。取。休。ま。多。く。那。隊。不。附。且。其。水。路。より。安。房。へ。攻。入。ま。す。と。の。風。聲。と。傳。へ。て。冷。笑。ふ。も。言。ひ。お。さ。る。肚。裏。か。思。ふ。も。扇。谷。の。淺。智。の。將。

昔より例もな海を渡して安房の稲村へ攻入るも欲するの時をも地理も思ひ
かる是浅智の致を所凶尋くして吉少るらん山内ハ聊思慮あり俱水路
より找まきし。國府臺を攻まきし。迂遠に似れども必是其利あり然りとて
今あつ那隊に従て縦戦功ありとも我ハ二の町二の町也。一歩の地もゆるか
要とをあれと尋思とあつ。白井の城を出し。胡意中途に掩留して敢五千子
來會せむ。且間諜見しめて寄隊の地。着陣の事の形勢を視知りし。景春
則隊の兵を或ハ百名二百名ハの地遣し。潛せて那身も既ハ來着るも
迹を埋め影と躲して猶動靜を視。程ハ前日の閉戦ハ寄隊の戰車如意
と。勝負區々ありし。其後寄隊ハ天士の龍り。岡山の陣營を圍。攻め
既ハ七の曉天ハ寄隊ハ戰車と敵ハ燒きて總敗軍ハ及ぶ時又那長尾の
間諜見が走りかへて告。景春滿面うち笑れて令るらん中里見の天士ハ必

敵の逃るを趕る。岡山の陣營空虚ハ做ん我ハの虚ハ限入り。又頭里を伐
捕り。國府臺を攻入。頭定主ハ鼻を削て兵權立地ハ我ハ入り。其ハ極
狼煙を颯々。近ハ四下ハ隱ハ在。自家の兵を集る。梶原。宇佐。美直。江。樋。口
ら。ど。喚。做。し。隊。長。各。其。後。兵。を。領。て。時。を。移。さ。ず。取。合。あ。れ。け。れ。其。兵。二。千。七
八百あり。景春是を二隊に分ち。梶原。後。平。二。景。澄。と。先。鋒。の。頭。人。と。し。く。
樋。口。小。二。郎。維。龍。と。し。其。副。と。し。則。隊。兵。二。千。を。授。け。て。真。先。ハ。是。を。找。ま。し。
却。景。春。ハ。後。陣。也。宇。佐。美。直。江。江。們。以。下。の。勇。士。と。雄。兵。一。千。八。百。有。餘。ハ。從。へ。り。
河原の岡山と投て推本。程ハ料も。今。這。里。也。里。見。義。通。の。信。乃。現。八。苦。ハ
カ。と。勅。見。と。亦。岡。山。より。出。陣。也。連。り。ハ。士。卒。と。い。ふ。を。其。一。軍。ハ。逢。る。ハ。間。話
休。題。却。說。里。見。長。尾。の。兩。敵。ハ。逃。ハ。其。旗。挑。ハ。夙。も。猜。し。て。叙。次。ハ。と
思。ふ。ハ。の。ろ。毫。も。礙。議。せ。し。近。く。隨。ハ。鑊。砲。を。發。ち。被。け。發。ち。ら。れ。て。姑。且。挑



危うければ里見の先陣後陣の隊長東辰相潤就鳥古内振照俱教二以下の
頭人武勇の毎疾這敵と敷き退けて主将を掻ひまゝんと心弥悍は喘まども
前後の敵不嚙締られて毫も追あるとるれば士卒の胸臆皆安うまを怯れはふ
あつねども竟て敵不推戻されて總敗軍あつんと浩如不誰と知む西北のく
るま道より走り出する一隊の客兵其隊僅に一百許探甲するなり然もるは皆
身甲の針脛衣して自ら長械を挟み一刀あり騎馬武者を并ぶ中只二個頭
領するんと見えたるなり其人青年二十可り面色白く骨相特不賤し身
中鳥草絨の敗金甲を撰く火形打る頭鎧と戴り腰に大小の二刀を跨ぐ
自ら雙鉤の鎗を執りる相貌堂々威風凜々衆不先を聲高やふを景
春を礼をせ里見八犬士の知音なる武藏園の浮浪人政木大全孝嗣あ不在り
退けやと喚れ左右不従ふ老若箇の猛者們も衆聲苛めく我其敷い

糸ども亦是犬士由縁ある石龜次團太越卿三向水五十二太枝獨銜素吉
乾父乾兒共侶不里見殿の加兵と名告り相叫りて身勢不撓を先と争ふ其
隊の壮佼五六十名持る長械振ひめりて敵の乗る馬の脚を難し拂ひ落して
起んとまを敷殺を勇悍一致の拵は長尾の士卒の驚愕にて憶を激と乱る
孝嗣はと割る入る鎗の尖頭血を濺げて瞬息間敵幾名斃伏せ又刺
殺せし次團太卿五十二太素も吉皆共侶不水成を大刀をひかく抜駈して敵
中りく樹と盡せ里見の老黨近習の毎鳥山真人白濱十郎七浦二郎朝夷
三弥以下の雄兵是れ氣を以て装更ま刃頭尖るるぬるれば長尾景春怒る堪
む馬上の聲を苛立て建は自家の兵毎敵不加兵のあれど二百名不過さ
何ぞ怖るこやある疾推包を敷果さると嗚り喚り近づく敵を鎗のく拂ふ
奮奮突戦猛將の下不勇士の景春の隊の兵ら又ある一向不罵勵さ

して建更らば挑戦ふ三陣の野戦五角を勝敗果一なるは話分両頭介
 程大江親兵衛の前月の下津秋後條將曹廣當と那石茶師の頭を既ふ
 相別れより則廣當の教より敢東海道赴き尾張と過り信濃路より
 上野及武藏下總と歷て益々安房へ還んと姥雪代四郎以下の伴當親兵衛
 いたぐ立ちゆく程おの次の日より那名馬走帆の何となく病る容あり豆草も
 多く喫ま路とよくと遅く作りかど親兵衛の心長閑くよく是を勤りて敢亦
 うちも無ら影兵衛お是を牽せて只其の儘せが一日僅四五里ゆく歌
 店と投る夕多より左右ま程は稍信濃の馬籠に至りて歌を客店に投り
 宵より走帆の疾病の重くるて臥る隨ふ起もなれば親兵衛痛く是を憂
 いて伏姫授與の神茶と合出て其舌の塗うして親を飲さる人畜其差
 あり故馬其效ありさる欲或は是死病を神茶の至妙も及さる者多欲と

思難く徒ふ只這病馬の故とて逗留之四日逮びく代四郎紀二六心焦燥
 々隨ふ俱の親兵衛を諫ての事と和子の慈善の今創めを愛顧畜生なき厚
 なる人の及ぬ所を漸京師の厄解て還ることを願ひ又那病馬小構つらひて
 逗留して日を費しぬは只是知智者の一失秋仁義も時因るは遙く安房の
 めと思へ両館の言もゆらん妙真刀自大士達の朝居夕居人止ては俟不樂
 在さふおの思ひぬとて迭代は説出て卿言か多く急せ親兵衛是を
 聴て然も我亦其頭の事と思ひざるわねども争何其那馬ハ虎妖對治ハ大功
 あり那時他も我を馳せて進退自由なるを我何をぞ那功と奏して安房へ
 還ることを饒されんや然も那馬病臥りて去向といを於て垂果ては不仁不義の
 甚しき者心牛馬も不如とられん故我ハ走帆を政元王の賜入とて敢鐘
 愛あるあを只那大功ありと今其死活を見定めると垂果る心忍びがかる

のと然いあらざるや。と解論其代四郎紀二六感服して又いふよりもるる。漕地喜勘
 太伴當親兵衛さへ少知りて現這神童やて這仁義あり。今古和漢も獨歩
 まさしく感嘆せざるるのけり。然而あつたの日本病馬走帆ハ幣れハ親兵衛只顧
 嗟嘆して其馬異日戰場不用ひる。鬃羽の赤兔馬も優り縁薄くして其
 里の幸毛嗟夫惜むべく他今馬籠の御りて命空くならけり昔我仲の愛
 馬を牧せし因も縁あり名詮自性狹も亦一奇といふもの。と獨語に遠く
 逆旅主人を召きて件の馬の空骸と今宵近江片山其陰の瘞んを相譚ふ敢旋
 陀羅の多を借らざる皮を合せしと思へん當下親兵衛代四郎と喚ひいふ。豊る
 曩富山を。今娘達を馳來おけ。那靈馬の亡骸と瘞ぬあひし折ハハくあぬけ
 やん。今開の微末あねども我聞唐山古昔の制度ハ狗を埋る蔽蓋と以馬を埋
 る蔽帷と以とといふ。あつた礼記檀弓に載りあり。蔽蓋敗るさぬ。蔽帷ハ

むれたれ布へ有恁れも今我の旅中あれ然る東西。大袂のあふ死而固許然り
 合せ。走帆の亡骸と裏せぬと吩咐れ代四郎听異議も。噫和子の博識を
 今稍あつたぬ。咱が富山で那靈馬を埋り折品山嵐の内ハ東西る然る
 故事と知され直埋りしひたと答へ馳退して知紀二六と親兵衛も件の事を示
 かく形如く執りし。鞍と鏡の送り。親兵衛則逆旅主人。あつたる預ら
 せ異日あつた道の場。馬頭觀音院へ藏りけり。然る這夜艾瘞駛の事果一ハ
 其詰朝親兵衛代四郎と紀二六と喜勘太伴當五個の親兵衛と相従へて只官
 路次といふ。その時十一月ハ既ハ盡す。十一月五日ハふりけり。その日親兵衛ハ一雨時
 茶店ハ總ひ折代四郎ハ叫く。我ハ女神の冥助あり。文学武藝何れも自得
 せざるる。只水戲水馬の術と。いふ。學子得ざり。早暮奇子崎の賊難ハ既ハ
 溺るる。いふ。豊の援けよと。恙るる。折を朽惜く思ひ。昨宵我夢裡ハ身ハ又

富山の品山不在の姫神出現すゆて水戯水馬の一術を教ふと町守也且宣
 我始より這一術を汝に教さうけり。胡意欠く所をて懲してみらう其意なき
 ありんをえけり然るに今戦國の時不當りと水戯水馬を學びて戰場に臨むは
 とも何ぞもく波を被る水と浴して敵を征せん或は君將の危殆を極ひたり或は身の
 亡ぶるを保つに至るも水と知れば善くも勉めよかと論しぬと思へ曉の鐘枕の
 响は忽馬と駭馬は覚る覚るの後不是を思へ実ふよく學得くその身も備る者不
 似る意不異日館の死為水戯水馬を用ふ死時しもある然るゆゑと告る
 代四郎うちて夢の五臓の疲労不成ると人のいへども和子の夢の久く京師に抑留
 せられて且と御を思ひ宿の所以の事あはる水戯自は実事あり必是姫神の
 神護る靈夢をそひぬと言正首は合る折々忽地四下開き人東西奔走走
 るを井の中土民們が這茶店の邊に立在て且相告るとち其人のいふ

和主少忠今番扇谷の管領家の安房の里見と怨みありとよとの故
 山内の管領家と和睦ありて且近國の諸侯と連ねて海と陸より安房上總下
 總ま一時不攻會んと身日猛可這頭へも軍役と死れり今朝亦再度の催
 促あり水路の扇谷殿御父子向せぬ軍兵約莫五六萬多べ又陸路の寄隊を
 導く下總より行徳口へ扇谷の御嫡子朝良君と千葉自胤主と兩大將を
 大石兵衛尉殿副將より。大石石見守憲重の始兵衛尉より本徳第四郎より。あも亦
 其勢二四萬多べ又園府臺の城へ山内殿御親子と濟我の御所と兩御旗
 下從ふ城主隊長より其兵六七萬多べ。通計二十五六萬の大兵を欲海と
 陸より攻められ哀れ安房殿。滅亡するんといひ一人が然りと里見殿の今
 世稀多仁君と云哨守の逆多き八犬士との猛者あれ非如軍兵多きはも
 ど東にて徒らの負人少く洲崎敵と逆る水軍の大將の國守里見殿也

詰朝早天より。散店と出て。情やふ人のかゝる山路入り。岑峰の降り溪に降
て。武藏の至り。欲れも路を迷う。投まらざる山路。早一暮春せども。神
茶の奇効あり。主僕俱に。餓を疲れ。心るる。二三日を。歴て。十二月八日。初夜。山内里見。而
武藏の石濱の城。程遠かる。千束村の邊。ある。けり。然。昨日より。山内里見。而
敵は。葛西假名町。あり。一。圍戰の。勝敗。又。景。河堤。多。岡山。を。攻。敵。は。莫。も。
街談巷説。よく。知。れ。る。親。兵。衛。の。あ。り。至。て。代。四。郎。紀。三。喜。勘。太。親。兵。衛。當。門。を。
送。り。身。邊。へ。招。き。か。せ。り。既。に。知。る。館。の。御。大。事。は。是。邊。より。今日。岡。山。の。
御。陣。に。参。り。御。曹。司。の。御。先。途。に。遇。ひ。後。悔。臍。を。噬。ん。然。る。も。捷。路。を。破。り。て。
墨。田。河。を。涉。り。石。濱。の。城。兵。等。が。怪。し。趕。蒐。て。敵。を。捕。ま。せ。開。け。怕。る。小。足。は。
ども。無。益。の。敵。を。拘。り。ら。る。今日。の。圍。戰。に。値。さ。か。ん。の。故。に。千。住。河。を。憑。渡。り。て。龜。
蟻。葛。西。の。造。り。多。岡。山。に。近。き。黎。明。な。れ。人。稀。く。各。各。我。衣。を。長。柄。の。

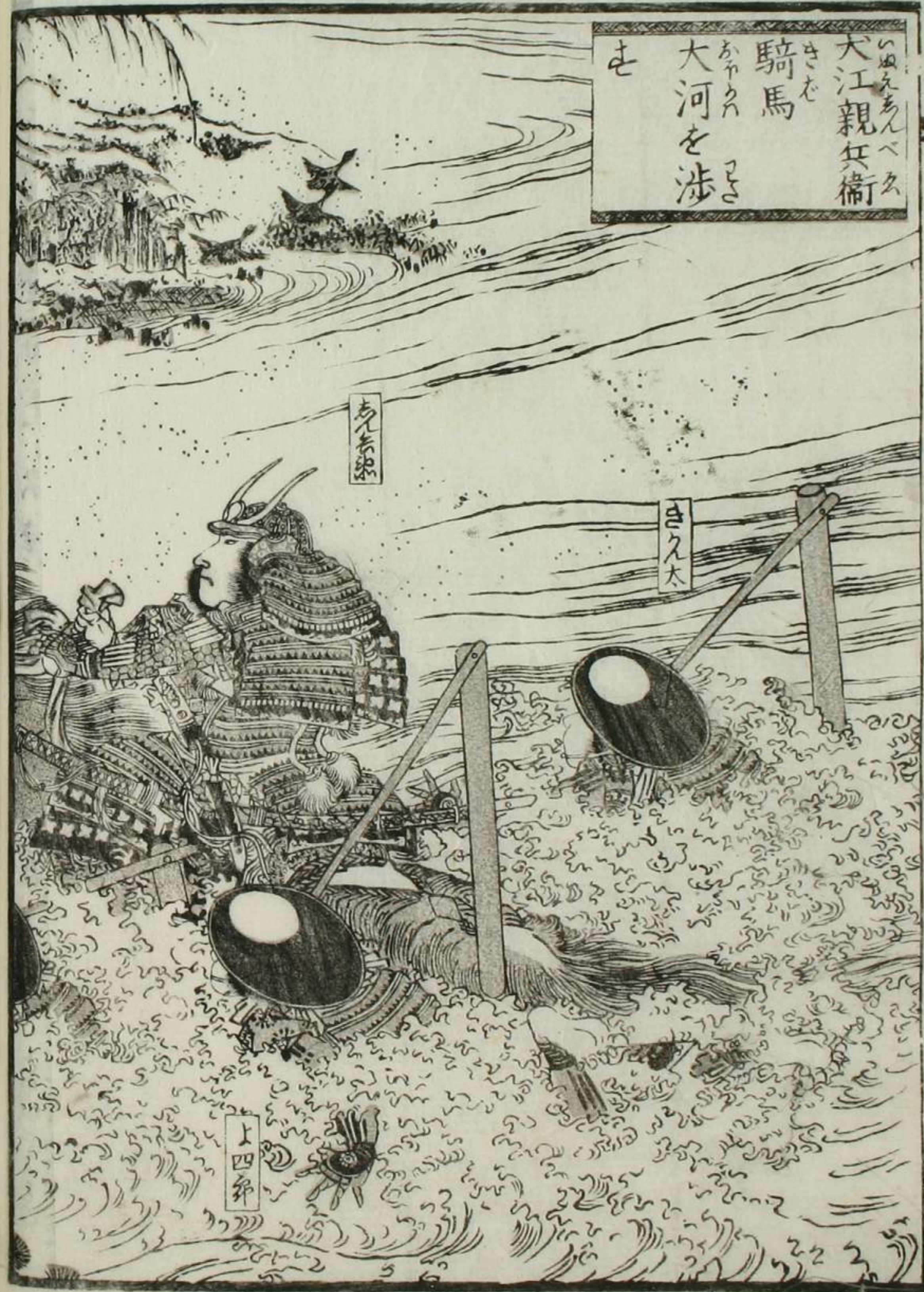
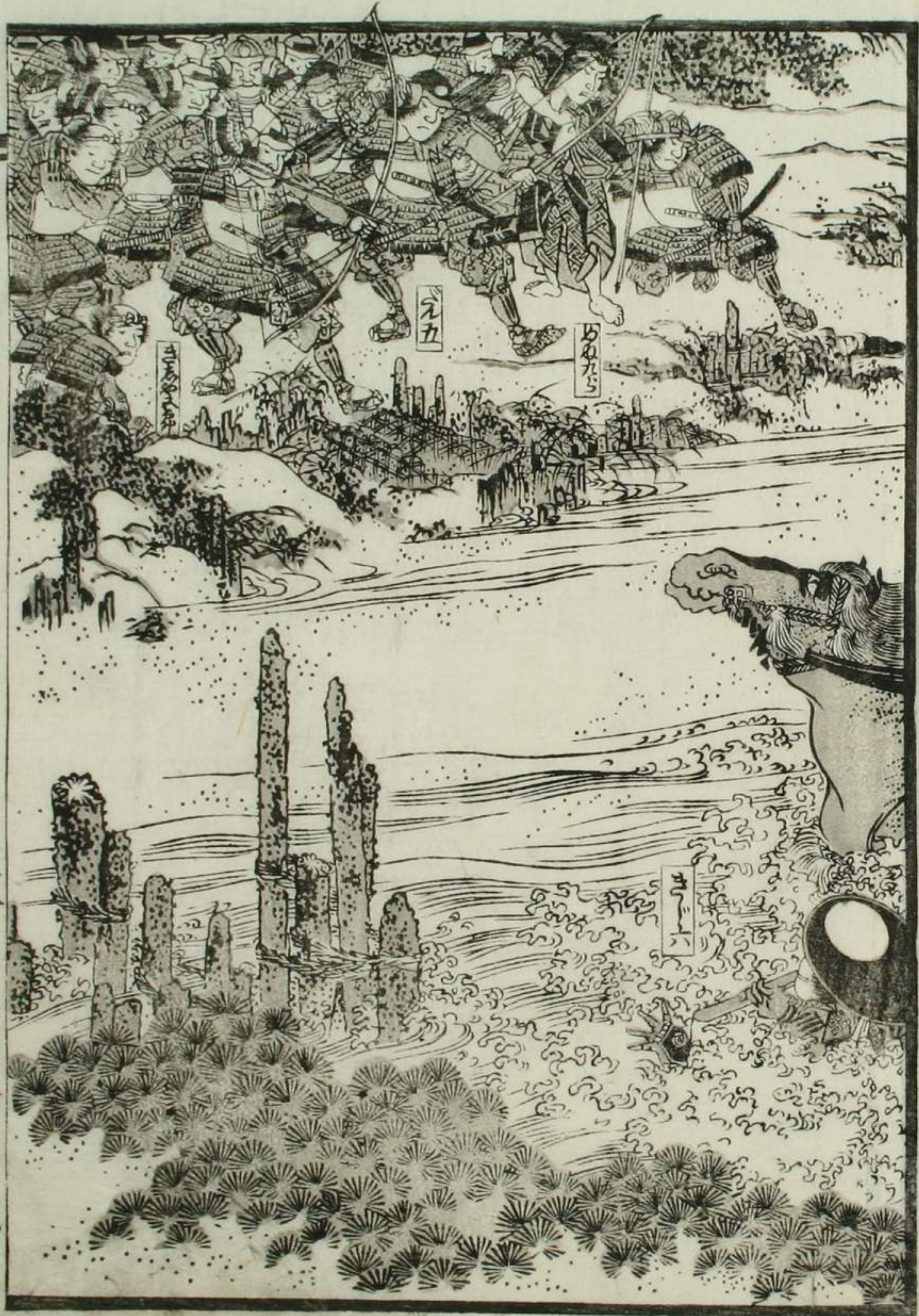
器械と執るも。あつた敵は。淋と不便。見る。那。里。の。白。屋。の。背。門。に。倚。り。け。り。
連。枷。多。り。連。枷。の。軍。陣。は。是。と。用。ひ。其。利。あり。の。唐。山。の。書。籍。見。え。り。
然。と。も。農。民。の。田。器。と。奪。合。を。あ。ら。む。價。を。送。さ。罪。を。喜。勘。太。の。衣。を。
ある。て。其。残。れる。連。枷。は。是。を。結。附。て。よ。い。う。懐。と。撥。撈。り。方。金。三。片。強。三。片。強。
紙。を。拈。り。て。合。ま。れ。人。皆。並。て。親。兵。衛。が。信。折。り。折。り。折。り。心。正。し。た。を。感。し。け。り。
當。下。大。江。親。兵。衛。の。伴。當。一。本。甲。曹。櫃。を。用。甘。鐵。を。探。け。兜。を。戴。り。
大。刀。を。跨。身。を。固。め。且。伴。當。が。肩。に。あ。る。鎧。を。執。て。挾。み。代。四。郎。以。下。の。衆。人。を。
皆。遠。く。我。衣。を。代。四。郎。紀。三。喜。勘。太。の。行。李。の。内。に。身。甲。あり。其。身。甲。を。着。者。皆。針。
脛。指。の。と。あ。り。喜。勘。太。が。合。ま。り。て。來。ぬ。連。枷。を。受。取。て。准。備。立。地。の。成。り。て。
親。兵。衛。の。先。に。技。を。千。住。河。原。を。投。て。程。不。後。方。に。續。く。代。四。郎。と。屢。見。各。
傳。い。き。更。と。我。の。身。夜。の。夢。に。姫。神。我。水。技。水。馬。を。教。め。と。見。て。了。り。既。に。是。其。

御の学は者不似るの今日所要不達とて夢入るをいひ幽真人間
 異るれも今も影の立ち形は添ふて徳もふ慈愛ぬまの神恩の過分は成
 仰せまも猶畏しといへ代四郎點頭て然也々々寔ふ公も那御神の恩徳の
 小可一家も相同し寔は天地父母國土君上師授神佛の六恩と并ぬぬと
 春る間千住の大河邊に來しけれ親兵衛後方を見らるて親兵衛當們の
 今や這大河を渡りゆげべ則下總を那里今圍戰の最中なれば這頭不船の
 渡まを冠り徳れ皆馮心涉して前岸に至らんと勿論へ縱今去冬大寒の時
 るも及石各既比皆我神茶と服しこれ水入るとも凍るともけの毛の心易く
 べ約莫水枝をぬるも亦得ざるも俱神茶の奇特なり弱る者もさうな感の
 連柳の相連り或は送ふるも推乃て我不續して歩まいいでるといふも既水際へ
 找む折る怪むべ前向の岸を走り出する一箇の馬の疾工宛鶴の像く河へ交

と入ると見る間其馬殊不逸早く這方と投て近々程親兵衛代四郎いへん
 紀三喜勘太自餘の伴當他甚麻とる俱は訝る開か中親兵衛の眼敏
 代四郎の公を曳いの不るやん那馬の毛我愛馬を青海波不似とるや
 開の左まれば右のれ那馬必駿足るるべ今大河をうら渉ま聊も撓むとなく半
 身波より上へ出る其速るるといふや我今戰場へ赴る良馬とる身幸い哉
 登ると待り馳駐めをよとの代四郎紀三喜勘太伴當相諾るして行李不附
 た麻索を解け伸し相構る登ると遅しと俟程の馬の水と出て汀渚の
 立ち身震し敢又走りもせむ徐に這方へ來おければ大家俱立立蒐りて輒これを
 牽駐めけり登時親兵衛立ちよて見ゆ憶お合笑る曳よ今我のい違ふを
 是紛ふもぬ我馬青海波を有ける曩我御使を奉りて京上りおける
 日の水行身故不是を牽せむ麻櫛掌管不預け置し京師を政元主の那走

帆を賜りしより。虎妖對治を我を幫助けし功を愛て捨る小忍びを然とも。這青海波と忘れらるるあなれども。現兩雄の雙立を晝夜の同時小長らるる。那馬去て這馬來りける。抑得失の天入時へ然るをも。這馬逆安房より來りける。鞍鏡の老侯の臣も賜ひし隨ひて。上總と過り下總と麻止る。我身を迎るる忠信情義那走帆。勝れると十級百級。夢欲現欲。幻欲奇欲。馬あはれと稱て感嘆あはれ。代四郎紀二六以下の伴當親兵衛もいづく。一唱三歎の神童あはれ。かせは。悠る奇特。不遇のやと思へ。心勇れて。縱今日百萬の大敵の中るとも。何ぞも勝る。とあらんや。と皆憑る。死附驥の情あり。當下親兵衛又のや。昔唐山奈月の管仲の深雲の山路。迷ひ折老る馬の古く。信せて還る。ことゆらうと。我も亦の青海波の如く。小鞍を儘せ。必や御曹司の御陣。又蠅く届るべし。各馬の尾小推たり。或は鏡あみと。拭て俱不。渉ぬ。溺れるせと。去りも。鎗と突。老馬あがり。とち

の。腰鞆の。鏡を。蹴拍く。河へ。颯と。騎入る。代四郎紀二六以下の。伴當親兵衛も。俱。小。身と。跳。り。せ。續。ぎ。飛。入。る。河。水。の。現。神。某。の。奇。効。る。べ。し。温。り。と。冬。を。覚。び。且。水。技。を。知。る。者。も。身。の。よ。く。浮。き。易。ら。け。る。開。が。中。の。親。兵。衛。の。靈。雲。夢。あ。り。て。水。戯。水。馬。の。術。を。よ。く。做。す。の。ま。る。る。馬。の。名。も。自。ら。青。海。波。の。駿。足。の。時。見。れ。て。水。中。陸。上。り。易。ら。け。れ。代。四。郎。紀。先。ら。と。五。六。反。前。面。の。岸。に。近。つ。程。思。ひ。し。る。死。小。敵。あ。り。其。隊。僅。小。五。六。十。名。皆。較。皮。甲。曹。小。身。を。固。めて。槍。棒。眉。尖。刀。を。引。提。し。る。あ。り。真。弓。箭。弓。と。執。れる。あ。り。東。の。塘。堤。に。立。見。れ。て。親。兵。衛。と。う。ち。拮。拮。と。う。ち。拮。拮。と。固。めて。射。被。る。征。箭。の。雨。より。滋。く。射。く。落。さ。え。と。競。へ。も。親。兵。衛。の。毫。も。怕。れ。ぬ。兎。を。傾。け。馬。を。囚。せ。く。前。面。の。塘。堤。に。馳。陞。る。と。敵。兵。們。の。相。逆。へ。く。推。捕。は。龍。て。敷。き。ん。と。ま。當。下。親。兵。衛。鼓。耳。高。や。若。們。は。是。何。人。を。里。見。の。八。犬。隨。一。人。犬。江。親。兵。衛。仁。を。知。ま。し。知。ま。し。本。事。と。見。せ。ん。と。の。よ。り。早。く。鎗。會。伸。て。打。拂。ひ。又。打。拂。を。向。ふ。前。



るに勢い猶懲まざる川鳥の群より像く挑む程に姥雪代四郎直塚紀三六
 潜地喜勘太伴當野兵も推續たり渉り来て敵と擇も連初めて敵伏せ捷
 折く利便の器械其機小稱へ敵の乱れて逃走る猶漏さすと軒鬼をも親兵
 衛急小喚返して叟より直塚も憚るべからば益の敵小時と移して御陣へ参る
 期と喪る後悔其里小達るかかん因て憶ふ今この地方小這頭の敵のあり
 ける必故るを我猜まる小這奴們的寄隊の士卒るぬ野武士山豪の類
 来あり金むらひ升が中巨瘡を負ふて仆まざる這奴們的尚死さるもある其来
 歴と責問をよとふを野兵もうち立て一個の傷瘡見よ左右より引起り捷惱して
 出処来歴止と責問ふ始り頼陳ふも緊く捷れて苦痛小堪ねば竟お招き後
 るを刀柄們やよ実を吐ん姑且答と饒り小可の這衆の夥計小は実の活
 小野目奴九郎と喚做る馬盗見でひ然り昨宵岡山る里見の陣へ潜り入る

良馬一頭と竊得て幸りて這頭へ来る程に豫相識る野武士の頭領西的寄
 舎五郎須々利壇五郎と喚做る狂者もが支黨五六十名を率て前面より来
 る小逢ひぬ因り馬を售り思ひて見せ價と定む程に馬の猛可暴嘶を
 走り河へ跳り入りと赴へる速さより果れて長視て存り小豈計んや其
 馬を大人小獲られり跨り伴當達も共侶に這方へ渉りあふるん寄舎五
 壇五郎の衆人へ天場大人を射て落し馬を奪んと構へ大人の勅勇一
 人當千伴當達さへも煖煉る瞬息間小多人の敵と敵散し數小事
 竟ふあり至る有徳れ是小可の那夥計小は實の饒させぬと勸解は
 只管口説けと親兵衛つらく果て代四郎小向ひて小中。叟よ我が馬の来歴を
 今を思ひぬるを必大塚う大飼が我這回小閉戦小遇ざる最惜を
 切て我意馬を。這青海波と戦場の乗馬をさす欲する故に這小安房より

既小くこの頭領の大江の馬前近つたて跪居て俱に許さず。小可の眼
ありて。任豪傑と認めぬ。漫其馬を欲する故小可も驚き前を馳し。毛を
吹た疵を求め。後悔の外に。既や大江親兵衛と名告め。心はな
皆逃れ。遠く去る。梢を還る。樹蔭に隠れて便宜を待ける。君の愛
馬を竊る。這活間野目奴九郎と云。饒一の寛仁大度。景仰の思ひ
切られ。這身の罪を見え。願ひ稟さる。あつた。海客まあ。抑小可の
原是當國千葉の退糧見中。傳ふ氣を使ひ使と立る故。乾兒者數十
名あり。又年来交を結ぶ。野武士の頭領。高飛車。和女九郎。劍峯。齋四郎
と喚ばる。他は。原是常陸國の人民。其隊小破。破落戸。亦是二百
十數名あり。這回扇谷山内の西管領里見殿と兵を構て。寄隊當國小
發向と云。此小可毎里見殿。從ひ。欲り。和女九郎。齋四郎の

謀と用ひ。他は。彼我殿。從ん。路次。迎へ。倭々。請稟。猶疑
る。あつた。その義を饒され。故。和女九郎。里見の戦粟を奪
略。欲て。五十四田の陣營の空虚。折急。推寄。陣門を打破。守陣の
老兵を殺走。奪略。所の戦粟千袋。百苞。成是。船小積載。且衆
河を溯り。漕りて。去す。程。追隊の兵。殺禁。其船を棄。論。和
女九郎。齋四郎。里見の隊。長田。税力。介と。搦捕。られて。竟。首。刎。ら
る。と。風聲。よ。是。知。然。我。始。夥計。不合。故。憶。を
時。後。れ。國。府。喜。城。へ。参。り。加。る。死。情。願。と。治。果。を。只。得。這。頭。小。屯
寄。隊。尙。う。ち。負。る。有。名。の。落。人。と。擇。敷。小。敷。捕。り。開。と。功。一。七。義
通。君。の。御。陣。へ。齋。一。愚。意。と。演。て。請。け。那。仁。君。の。御。蔭。に。依。り。欲。せ。御。不
活。間。野。目。奴。九。郎。が。牽。り。て。賣。り。と。り。馬。を。贓。物。と。猜。し。其。毛。は

模様波濤に似る異相あるのみならず、
 面眼背梁蹄まで一箇も虧かざる所
 あり。其の稀世の良馬にあらざれば、
 愛惜の惑ひ醒る由なき。漫ふ大人に敵對して
 するは罪と醸せし。今や後悔の外なき。近曾里見殿の御内人八犬士と稱
 する。文武兼備の壯士達八名あり。夫人は少の名の。今ぞ知は大人の仁心
 武藝の精妙。今古獨歩の英雄。驥尾に附せ俱一の。野計の兵母と
 從へ。今日の軍の微力と盡さん。の言尚詐語あり。身の天雷打摧れて来世の
 畜生道の苦と稟べ。天神地祇も照監あれ急々如律令と唱へ。俱一箭を折
 り。誓言と做せ。送代の胸忠口誼誠心氣色不見れ。親兵衛馬よ。所果々。感
 する。と大なる。の。原來是和殿們的。孰も義侠の人入り。既して我君の盛徳と
 慕ひ。俱一歸服の情願あり。我豈汲引せざらんや。支賢と薦め士と擧
 る。人の臣たる職分。事由とゆえ。上る。必や用ひられ。我初に和殿等を知む。

霎時相戦ふ程。小捷し。け。傷瘡兒幾名歎あり。在り。遮莫我に神授の仙
 丹あり。是を用ひ。時を移さ。皆立地小愈す。先其下の衆人を召集へ。と
 といふ。寄舎五郎と壇五郎。怡悦不堪。言兼あり。俱一後方と見たり。と
 招け。出ま。下の衆人。樹間藁塚の陰より。陸續と。近づ。皆親
 兵衛のち。向ひて。跪居て。額を衝ぬ。當下親兵衛に代四郎と喚ぶ。と。叟
 よ。和老の腰。茶の籠。残れる。仙丹。猶有人。并。些。傷瘡兒。不。施。して
 起。せ。ま。と。の。代四郎。あり。七。腰。と。撈。り。茶籠。より。那神茶。と。合。出。せ。紀二
 六。喜。勘。大。多。修。ふ。て。傷。瘡。兒。們。不。當。さ。ま。喜。勘。大。の。又。目。奴。九。郎。も。施。さ。え
 と。あ。げ。る。親。兵。衛。急。に。喚。禁。め。て。や。れ。喜。勘。大。其。奴。の。因。縁。我。今。其。奴。一
 人。を。憎。む。情。を。あ。ら。ね。ど。其。奴。撲。傷。亟。不。愈。身。の。掙。泥。自由。ある。か。
 必。又。竊。盜。せ。ん。御。高。小。我。と。諛。ふ。人の。戎。衣。と。剥。合。う。那。身。再。生。の。恩。報

ふべし。このひの次見根性る。有はれが上。我教諭。従来似れども。癖の改めたる底。意の今の一言を知られら。あどめて他今より。厄弱不具。在るる。一生涯を異りて。其天年と終るべし。其の故。我を他。の。敢神業。と與へざる。是情を。あを。反々。慈悲。仁の術。感ひと。取て。恐おせ。と。理り切て。解諭。目奴九郎の敬頭。と。悲しや。あふ。我の。独坐脚車。法衣。世ふ。黒塗の住不樂。て。鉦を。敲。て。終り。や。せ。哀。と。伏。沈。む。程。も。あ。は。傷。瘡。瘡。見。們。の。神。業。あ。ふ。即。效。あり。傷。愈。痛。消。散。して。氣。力。日。来。二。十。倍。の。強。ひ。ふ。堪。ざ。れ。比。自。覺。然。と。身。と。起。て。跪。れ。親。兵。衛。を。伏。拜。む。と。數。回。奇。也。と。稱。贊。の。聲。耳。と。合。せ。感。ま。れ。野。計。の。衆。兵。へ。あ。ら。寄。舎。五。郎。壇。五。郎。俱。お。奇。小。敬。馬。に。敬。服。して。親。兵。衛。向。ひ。て。い。ふ。是。大。人。の。妙。用。巧。致。華。陀。蒼。公。も。あ。ら。る。べ。活。人。の。も。段。不。可。思。議。哉。就。て。稟。一。試。ん。と。思。一。議。あり。徳。

いへば。目奴九郎が。諛言。做。ふ。小可。們。這。人。數。の。外。猶。甲。由。四。五。領。弓。箭。鳥。箭。銃。あり。今日。御。加。兵。の。執。代。伴。當。達。か。ま。あ。ら。せ。ま。く。欲。ま。の。義。を。饒。し。め。ん。や。と。請。ふ。を。親。兵。衛。う。ち。听。く。現。和。殿。們。の。我。君。の。盛。徳。を。仰。じ。ま。り。新。參。の。義。あ。ら。ま。今。より。後。我。も。伴。當。們。も。則。是。祿。と。與。ふ。と。な。る。明。輩。る。れ。介。意。ま。さ。も。あ。ら。ま。況。や。今日。の。戰。場。我。隊。の。士。卒。小。素。肌。の。者。あ。ら。人。必。怪。む。且。外。聞。も。宜。し。く。も。然。る。と。今。幸。し。和。殿。們。兵。具。不。餘。あり。と。り。開。と。贈。ん。と。あ。ら。折。り。折。り。便宜。と。い。ふ。べし。臂。近。あ。ら。る。と。い。ふ。寄。舎。五。郎。壇。五。郎。扶。び。兼。て。隨。即。下。の。兵。每。も。倍。々。と。吩咐。れ。其。兵。每。身。を。起。して。遠。く。茂。林。の。内。より。目。取。大。に。考。考。筆。と。十。箇。あ。ら。り。背。馳。せ。り。蓋。し。開。け。合。ひ。出。ま。甲。由。十三。領。銃。砲。七。八。挺。あり。則。是。を。呈。ま。れ。親。兵。衛。馳。て。代。四。郎。等。分。ち。與。へ。擐。甲。も。當。下。代。四。郎。紀。二。六。喜。勘。太。野。兵。伴。

當門の寄舎五郎壇五郎と其毎小名對面して歎びと速く身と固る時
 親兵衛がのち我隊の兵皆連枷あれ器械小事とたねども然も侍
 品者者の農具をのり敵に向ひ面正しもるに所行るべし見る不鍊砲も七
 八挺あるをぞや井と叟と直塚と喜勘太と夥兵五名の推乃くゆくて七より
 れ伴當六名の故のぞ。連枷を放つべしとせんといそむる大家唯々と諾
 るて準備をやく成りて親兵衛樹杪を仰瞻て憶む時を移りて朝
 日の既高く昇り辰牌をゆるぬべしとせんといそむる騎馬の泥障と蹴鳴
 らして青海波々々我今御方の陣所ありま欲を然どもいそむ其捷徑を
 知らぬに去向と休任せてんや疾我を導はね大家續けと喚りて馬を拍を
 走らまれば皆後れと相従ふ親兵衛が隊の兵は姥雪代四郎と首あつ伴の
 奴隷に至るまで僅小足十四名今是加ふる二四的寄舎五郎須々利壇五郎

其毎六十五名合せて七十九人より一百名不足らねども勇將の下弱卒をけられ
 皆大敵と怖る者る深山と歩若鷹の振鷺を驅る威勢奮然其倚あり
 あつるの土は嚴冷されて立ちまれば跛兒の命活間野目奴九郎身三人をも然
 たる面と皺めり目送りけり目奴九郎の事。下の話あり。介程ふまの朝里見太
 郎九義通君の信乃現八名。二の寄隊と闘戦の危を援んをみながら岡山の
 陣營より推ゆる其方と投る士卒と找る其路の遠く相川の松原を長
 尾判官景春が岡山へを推寄來る數千の獵兵相逢る前後中央に隊の
 聲を聞戦追あるをみれば里見の隊長東六郎洞跡鳥古内振照俱教二
 白濱七浦朝夷們のゆえ突然と来て里見と援る政木大全石龜次團太
 越卿云向水五十二太枝獨鉦素る吉其小従ふ高師航工俱小長械を
 うち振て苦戦の時を移し。就中政木大全孝嗣の文武兼学ぶ社士を

弓箭執て。為朝の機臂と旋らまひ段あり。器械不縁る。栗姫の牛孺丸も少
らざるべし。一人當千るもの。景春も亦東國にて。二を争ふ。勁將を以て軍
学不疎く。孫子の兵法諸葛の八陣。鞍馬八流。楠氏の七策。習ひしむと
多とみければ。士卒と使ふ。脚の如く。みぐる。屣敵の中り。力戦のまじ。唯雄を
決せ。有徳有り。程小長尾景春の最愛の子。小長尾太郎。為景と喚。傲と
少年あり。今茲十五歳の初陣あり。其機雄親。小方ら。父小俱。して。あの地
あり。あの日の為。景遊軍あり。隊共僅か。二百餘名。弱らん方と援んを敵の
隙と覘ふ。程小里見の先鋒の頭人。潤。就鳥。古内。振照。俱教。二の。あの時
既。戦ひ。疲。勞。れて。隊。竟。乱。れ。る。為。景。ゆ。り。と。士卒。と。找。め。る。自家の隊長
梶原景澄。樋口維龍。と相援けて。透。も。あ。ま。殺。顔。を。勢。ひ。宛。虎。彪。の。像
く。為。景。み。る。鎗。と。鏃。と。鏃。と。鏃。と。只。一。刺。ふ。古。内。を。馬。上。より。突。落。して。又。俱。教

ト。二。傷。と。負。ま。れ。ば。一。陣。竟。乱。れ。麻。非。は。く。總。敗。軍。あ。る。ん。と。浩。処。小。葛。西。の
加。より。探。甲。する。武者。一。騎。蒼。鷹。直。走。せ。來。る。勢。ひ。宛。飛。鳥。の。像。く。從。兵。五
六十名。皆。神。行。の。術。と。ゆ。い。疾。走。る。と。駈。馬。不。後。れ。る。衆。不。先。ず。騎。馬。武者。
近。く。隨。小。聲。震。立。く。其。里。多。敵。の。旗。の。花。旗。あり。あ。る。は。白。井。の。景。春。あ。る。
恁。我。を。知。る。や。知。ら。ず。里。見。殿。の。御。内。也。八。犬。士。の。隨。一。人。犬。江。親。兵。衛。尉。
金。碗。仁。あ。る。在。り。同。藩。の。老。兵。燒。雪。代。四。郎。與。保。蛭。崎。の。若。黨。直。塚。紀。二。六
新。參。の。野。武。士。の。隊長。二。四。的。寄。舎。五。郎。須。々。利。壇。五。郎。們。あ。る。在。り。あ。あ。り。
と。名。告。被。け。相。叫。り。く。多。引。提。一。鎗。砲。を。合。直。一。敵。不。向。ひ。く。連。發。て。係
銃。响。と。俱。不。揚。る。喊。聲。耳。に。驚。見。る。衆。敵。の。真。中。へ。親。兵。衛。馬。乘。入。り。
鎗。め。て。四。方。八。面。に。中。る。儘。せ。く。難。仆。一。歐。伏。せ。れ。拂。ふ。奮。勇。獨。歩。の。拵。
代。四。郎。紀。二。六。喜。勘。太。們。親。兵。相。當。二。四。的。拵。須。々。利。と。隊。の。兵。等。さ

奮撃の突戦せざるもれば里見の先陣後陣の隊長東六郎振照俱教二及
 義通の隊下る鳥山真人朝夷三弥白濱七浦是の氣と云々奮勇始十
 倍ある士卒一致の大刀風然も長尾の勅敵も三陣一度不殺頼されて
 或は疾と負ひ或は敷く鮮血にり看み跌れ皆蟻子雛と散る像く潑
 と敗れて逃走れは景春為景怒り不堪罵林れも甲斐るるける梶原榎
 口守佐美直江も逃る士卒不誘引れて將帥歩兵の差別るく葛西のくへ
 乱走者多と大江親兵衛政木大全其隊兵姥雪直塚須々利壇五の四的當
 る時運向水水由縁の石龜も藻東卿三枝獨鉦も自家の衆先もて川
 拂ふ敵の息も親れも漏さぐとを逐るける畢竟大江親兵衛が歸東の忠戦
 時を得て石陣鐵馬も湯と做まもる鋒先殊小剛くり長尾判官景春の勝
 誇りる數千の勅兵を一擧不敗り走せ義通君の初陣武門の花を開せ

後の話説甚麼を分教あり奔馬追北大江籠暴禽舊恩報得成
 考完前言あと後回の題目の猶詳不知も欲せ又下回解分ると聴ねか
 作者云々の編の必六巻ありて續出を死者る何とる本回大塚信乃大飼
 現八杉倉武者助もが寄隊の敵將顯定成氏憲房と二面二度の闘戦あり
 のも勝負と決まる不速の又里見義通の野戰難義の時政木孝嗣石龜次團太
 越卿三向水五十二太枝獨鉦素多吉と其徒數十名と以て物と來て義通の苦
 戦を援る話説ありて考嗣次團太卿三の來歴止とて小具小寫を本通あ
 らるの故の第百六十七回まで今番續出て是等の事と詳あり看官お
 又歎く示さく欲しけれども刊約の書肆の板毎五巻と可とて六巻と欲せ
 志一卷言くて價と増せ賣買の為妙なるをといりあも亦故あるるれ愚
 意と枉て其好に従ふことと敢請江湖上億兆の君子達那闘戦の勝敗と

孝嗣們的來歷止と知ま欲さ又復後板五卷と續かき日と候れが。
 作者又云本傳の始より九輯百七十回ありて必局と結んとありのあをりく九
 輯の四十五卷之是を先例の如く一輯五冊の做と死へ則十三輯へ又第七輯
 八輯の七冊八冊ありと又分巻を加え數えて平均其十六七輯に至るべしを九
 輯の約め初念の已こととせざる故され回数數も只管百七十回ありて筆と絶
 まく欲せ故本編の一卷一回あり或一回と釐々二巻の做らるもこまあり
 去れども今と思へ本傳百七十回ありの局と結ぶ尚足らざる然りも夙案の腹
 稿の辟言ハ統ねる緒の如し是を文の做と死其緒と解延ふ不似て思ひ
 より長くるらざることをせざるを今より初念を改め二百八十許回ありて大
 圖圓の做も然れば言又その及べり。

南總里見八代傳第九輯卷之四十終

○南總里見八代傳第九輯下帙下編之上画工筆畊刷人目次

出像畫工 柳川重信 

補助畫工 溪齋英泉 

總卷 淨書 谷 金 川

二十六之卷 澤 金 次 郎

二十七之卷 常 盤 園

二十八之卷 高 谷 熊 五 郎

二十九之卷 全

四十之卷 澤 金 次 郎

○曲亭翁精編本房藏板畧目 江戸書林文溪堂

南總里見八代傳第九輯下帙下編之下 五卷結局大圖四
表引續は心

近世説美少年録第四集 初集より三集まで先年出版
本集五巻近刻

開卷驚奇俠客傳第五輯 右ふ同ト
五巻近刻

菅聖廟御傳記北尾紅翠齋画 五巻近刻

拈花窓譚 一名評論四大奇書考。この書は水滸傳西遊記三國志
演義金瓶梅の隱微を發揮せる國字評なり 近刻

○家傳神女湯 一包代百銅 ゆんわのみのゆやくりあふを血の二病より出
たる法痛を用ひてその功ありと云ふこと

○精製奇應丸 某種をえりてその功ありと云ふこと
ゆてその功効の如く大包代金武末中包代を各下小包代五ト云ふこと

○熊胆黒九子 一包代五ト まの汁を以て丸を製するなり
婦人の死虫の妙茶一包六十四文つてひらきん後不用ひてけりとのれひる

製茶本家 四谷志のり所瀧澤氏
十日谷の上 弘所活元醫留中坂下南側中程たき沢氏

○西条抄 のり所 仙女香一包四十八文 ○黒油美香同 江戸系橋南側了町坂本氏
江戸系橋南側了町坂本氏

○金匱救命丸 本御林氏製 弘所活
弘所活 小徳子町二丁目丁子屋平三郎
元坂田町中坂下了りて屋清右衛門

八代傳第九輯百六十七回以下近日出版全部九十九冊程多相揃ひひかり

天保十二年辛丑春正月吉日發行

京都蛸茶師東洞院西へ入

大文字屋仙藏 大阪心齋橋筋博愛町

河内屋茂兵衛 大阪心齋橋筋唐物町南へ入

河内屋太助 江戸大傳馬町二丁目

丁子屋平兵衛板

發販 書行

